

蘇る巨人 賀川豊彦

野尻 武敏

あの辛口で知られた評論家の大宅壮一が賀川豊彦を「世界に推挙できる」「近代日本を代表する人物」と評しているが、確かに賀川ほど多方面で活躍し、賀川ほど世界に知られた日本人は稀だろう。福音の伝道と実践に生涯をかけた牧師だったが、超ベストセラーの作家であると同時に優れた詩人であり、労働運動から世界連邦運動にわたる各種の社会運動の先頭に立ち、数多くの著作のいくつかは各国語に訳され、海外講演の足跡もほとんど全世界に及んでいる。わが国では長らく忘れられていた賀川の名が、このところ時折ジャーナリズムにも載るようになってきた。これは1つには、昨年末で賀川が社会活動を始めて100年になることから「賀川豊彦献身100年」の記念事業が各地で催されてきた、その成果でもあろう。だが、それだけではあるまい。時代状況の変化とも無縁ではないだろう。

賀川(1888～1960年)の壮年期は、両世界大戦の間、金融恐慌(1927年)と大恐慌(1929年～)を中に挟んで世界が大きく揺れ動いた激動の戦間期と重なる。賀川はそのなかで、資本主義は人間を圧殺し格差の拡大と恐慌を免れ得ない体制として、厳しく糾弾するとともに、その代案として登場してきた共産主義やファシズムの中央管理の体制も「人格」たる人間の在り方に反し、それゆえに長くは続き得ないものとして退け、「第三の道」を提起した。「人格」たる人間の「友愛」に基づく共助組織を基本にし社会を協同組合的に再編してゆく方向だった。こうした構想のもつ社会的意義は今日も小さくはない。

まず、第二次大戦の後、米ソ二極対立の末にソ連共産体制は賀川の予想通り崩れ去ったが、今度は市場経済のグローバル化と米国の一極支配となり、その下で生じてきた一昨年秋以来の「金融危機」で、世界は賀川の時代と何か似通った状況になってきた。賀川の資本主義批判は、そこに含まれる近代文明批判とともに、今日もなお妥当する。

次に、このところ先進社会に目立ってきた動きとして、助け合いや人助けの社会的な活動をする民間諸団体(NGO、広義のNPO)が急増し、市場と行政に加えて、もう一つの社会セクターを形成するまでになっている。これは、自由と平等に続いて友愛の世界が広がってきたことを意味する。賀川の協同組合主義も、新しい展開の機を迎えていると言ってよいだろう。

もう1つ、今日、欧米の世界支配は崩れ、新興諸国の離陸が相次いで、世界体制は多極化の勢いにある。そして、その渦の中で、人類は核兵器の拡散とともに、環境や資源など自然の限界の接近に怯えている。友愛原理に立つ賀川の世界連邦構想は、賀川の時代以上に現実味を帯びてきているのではないだろうか。